

青梅市文化財ニュース

第197号

平成16年3月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

ハシカ（麻疹）の神様

友田町一丁目の個人宅敷地内に「大日如来」と称されている古い石仏があります。像の高さ約 50 cm、幅約 30 cmの座像で、蓮華台に乗っています。磨耗しているため製作年代は、わかりませんが、江戸時代から「ハシカの神様」として信仰されていました。

この大日如来については江戸時代末期から明治にかけて小曾木村(現小曾木一丁目)の市川庄右衛門が村の生活を書き残した『市川家日記』(市指定有形文化財)の文久2年(1862)の項に記されています。「・・・この頃所々村々ははしか多くはやる。参詣の人多し。此大日は、石仏にて在家のうらの草やぶの中に立て有也。」とあります。

この年は、小曾木地区ばかりではなく全国的にハシカが大流行したようです。ハシカは、数十年に一度の割合で大流行し、当時は地震や火事より恐れられていました。また、疱瘡(天然痘)とともに、難病中の難病とされ、子供はもとより大人も次々に罹患しました。「疱瘡は器量定め、ハシカは命定め」という言葉にもなったように、ハシカの死亡率はきわめて高かったようです。『大江戸ものしり図鑑』によると、江戸では、20 万人以上の死者が出たといわれ、それだけに、さまざまな民間療法や祈祷の類が、人々の心を捉えました。市川家日記にも、京都からおまじないのお札と火をもらってきて、その火でお灸をすえると病気に罹らないといわれ、家族中でお灸をすえたとありますが、友田の大日如来にお参りに行くのも、人々の切実な思いによるものだったと推測されます。

市川家日記には「在家の裏の草やぶの中に立て・・・」とありますが、現在の場所とは多少異なっていたものと思われます。今は、大荷田川が多摩川への流入する近くの右岸にありますが、所有者(60代男性)は、このあたりは川の増水でしばしば土手が崩れ、明治か大正時代に石仏(大日如来)が川原まで流されて祖父が拾い上げ、現在地へ祀り直したものだと言っているそうです。

大日如来の周りには、小さな白い石や丸石、五輪塔の一部と思われる石も置かれ、傍らには絵馬を懸ける木杵も残っています。所有者の奥さん(60代)の話によると、つい数十年前までは、ハシカに効くといわれ、さらに知恵の神様としても信仰され、地元はもとより、小作や羽村方面からも参拝者は、あったそうです。また、友田在住の男性(60代)は、脚の

病気に効くといって信仰され、何らかの理由で足が痛くなったとき、大日如来の下にある白い石を借りて来て痛いところをなでると治ったそうです。さらにその、お礼として、多摩川に行って2個の白い石を拾い大日如来のところに返しにいったことがあるようです。

所有者宅には、大日如来の版木も残されています。この版木を使って和紙に大日如来像を刷り、お札あるいはお守りとして、参拝者に配布していました。版木には、中央に大日如来像が彫られ、その右に「友田村」左に「花蔵院」と刻まれています。これとは別に、梵字を刻んだ横2cm 縦6cmの小さな版木も残されています。この版木でも刷られて、「大日如来」と上書きされた和紙に包んで配られたようです。

これらの版木が、どのような理由で所有者宅に伝わっているのかは不明ですが、「花蔵院」と刻まれていることから、本来は友田村の寺である花蔵院が信者に配布するものだったのではないかと思います。奥さんはお義母さんから版木の刷り方を伝授されていますが、残念なことに、現在は大日如来に参拝する人は殆どなくなり、「お札の出番」もなくなっています。

この大日如来は、ハシカの神様とは別に、「お^{じゅうや}十夜」の行事でも大切な役割をもっていました。友田地区の2人のお年寄りのかすかな記憶と父親などの話から「お十夜」の行事が、昭和13、14年ごろまで行われていたのではないかと思います。前述の花蔵院を中心に「普門品観音経講」という講があって、この講が「お十夜」を執り行っていました。お十夜は、旧暦9月10日ごろ、講の人たちが行列を組み、うちわ太鼓を叩きながら普門品観音経を唱え、ときにはお稚児も出て賑やかに村中を練り歩いていたといいます。行列は、西は長淵二丁目の「十夜橋」(現在の旧鳶巣橋)まで来て花蔵院へ引き返し、東はこの大日如来まで来るのが慣わしとなっていたということです。なお、「十夜橋」のたもとにも大日如来をあらわす石仏があったそうですが、道路改修などによって今では失われてしまいました。

近年まで友田の大日如来は、ハシカの神様、知恵の神様、脚の神様、お十夜の東の拠点として、村の人々にとって大変重要な役割を果たしていたのです。

(文責 小川 秋子)